

ガイゼル侯国を縦断する街道の北部に、ベルダという街がある。北の商業国デロスへの窓口となっているこの小都市は、規模でこそ国都に遠く及ばない。だが、人々の活気に目を転じたならば、その順序関係は見事なまでに逆転する。

活気と喧噪の主役は、デロスとの交易を生業とする商人達だ。ひっきりなしに街壁を出入りする商隊が、この街の繁栄を支えているといっても良いだろう。そして、そこには、例外なく武装した集団が付き添っている。

キドロア帝国の旅は、決して安全なものとは言えない。彼らは、様々な危険から荷を守ることで報酬を得ている。ヴォルグもまた、そのなかの一人だった。彼がベルダにやってきたのは、五日前のことだ。商隊の護衛としてではない。自宅がある国都から、独りで旅をしてきたのだ。

一口に護衛者といっても、大まかに言って二通りの種類がある。ヴォルグのように住まいを持ち、そこを拠点に仕事をこなしている者達と、商隊から商隊へと帝国を旅して回っている者達だ。

ヴォルグは、国都の仲介屋達にはそこそこの名が知れた護衛者である。本来なら、わざわざベルダに流れてくる必要などないし、また正直気もむかなかった。

そう……。この街で、彼女の姿を見るまでは。

「お、いるいる」

ヴォルグは、今夜もその酒場にやって来ていた。ベルダに着いたその日から、夕食はここで取ることに決めている。店は宿屋と併設になっているから、部屋を取ってしまったえば話は早い。だが、彼にはそうもいかない理由があった。

そう広くない店内は、たくさんの客達で賑わっている。街の住民から旅人、髭面の商人から武装した同業者達まで、彼らの顔ぶれは実に多彩だ。共通項があるとすれば、お世辞にも上品には見えないあたりか。遠慮のない咀嚼音と食器の鳴り、加えて耳障りな喚きや笑いが、薄暗い空間を埋めつくしていた。

「いらっしやいませ！ 何になさいますか？」

いつもの通り、豚の腸詰めと赤葡萄酒を注文する彼に、給仕の娘はにこやかな頷きを返してみせる。

「腸詰めに赤ですね。それでは暫くお待ちを！」

赤く大きなリボンでまとめられた栗毛が、ヴォルグの眼前でふわりと揺れた。漂ってきた甘い香りが、柔らかに鼻をくすぐる。腰の剣を外して席に着いたヴォルグは、忙しく働く彼女の姿をただぼんやりと見やっていた。

あれは、ベルダに到着した日のことだった。

街壁の外に広がる草原の真ん中に、ゆったりと枝を広げた一本の大木がある。この街の象徴ともなっている緑の巨人を、彼女は独り静かに見上げていた。見たところ、自分より少し年下であろうか。とすると、二十歳そこそこというこ

とになる。年頃の娘がたった独りで街壁から出るなんて、昼下がりとはいえ無茶なことをするものだ。最初は、単純にそう思った。

——何やってんだ。変なのに襲われちまうぞ。

見ると、その掌に何やら動くものがある。それが鳥の雛であることを教えてくれたのは、風が運んできた細く甲高い鳴き声だった。悲鳴にも似たその響きに、頭上から低い鳴き声が応える。

枝を忙しく跳ね回る茶色の鳥は、おそらくあの子の親なのだろう。そして、その傍らの黒っぽい塊が、彼らの住まいであるに違いない。

様子を窺うヴォルグの存在に、彼女は気づいていないらしかった。やがて、その青い瞳がゆっくり瞼に覆われていく。ぴんと背筋を伸ばした彼女は、そのまま口の中で何かを呟いている様子だった。

「これは……、法語じゃないか」

やがて、穏やかな草原に静かな風が流れこんでくる。同時に、彼女の小柄な身体が、気の膜に包まれていくのが分かった。風は次第にその強さを増し、ついにヴォルグの周囲でも草の葉がざわめき始める。黄緑の波は、空気が渦を巻いて彼女に引き寄せられていることを示していた。

草と同じ色合いの服が、その裾を千切れんばかりに翻らせる。リボンの束縛から逃れんとするかの如く、長い栗毛が天に向けて靡いていた。

「ん？ お、おお！」

ヴォルグの瞳は、大地の束縛を逃れた彼女の姿を捉えていた。風に飛ばされたわけではない。まっすぐに、宙へと浮き上がったのだ。上昇を続けるにつれて、あれほど揺れていた髪や服が、次第に平静さを取り戻していく。

そして、風が止んだ。枝の傍らに浮かんだ彼女が、そつと眼前の巢へ掌をかざす。その中から、小さな灰色の毛玉が転がり出るのがはつきりと分かった。隣の枝で様子を窺っていた親鳥が、高く苛立たしげな鳴き声を上げる。

それに応え、彼女は空になった掌をかざしてみせた。と、その身体がみるみる下降を開始する。長髪を翻して地上に降り立つ彼女を、ヴォルグはただ呆然と見やっていた。だが、彼の眼には優雅と映った飛翔も、当人にとってはかんなりの大仕事だったらしい。生い茂る細葉に足先を埋もれさせるや否や、がっくりと膝をついてしまった。

「お、おい。大丈夫か……」

思わず駆け寄ろうとしたヴォルグの足が、ぴたりと止まる。巢を見上げる彼女の横顔には、柔らかな微笑みがあった。疲れきってはいるものの、深い慈しみに満ちた表情に、思わず視線が引きつけられる。

やがて、ヴォルグに気がついた彼女は何も言わず、どこか恥ずかしげに立ち去った。次第に小さくなるその背中を見つめ、ヴォルグは言葉もなく立ちつくす。なぜ引き止めなかったと後悔したのは、彼女が街門をくぐってしまったからのこと。慌てて追いかけてはみたものの、その姿は馬車の群れの向こうに消え失せてしまっていた。

「お待ちせしました！」

あの日の光景を思い出していたヴォルグの耳に、明るく弾んだ声が飛びこんでくる。顔を上げると、そこには注文の品を運んできた彼女がいた。紛れもなく、あの法術使いの娘である。

何の気なしに飛びこんだこの店で彼女が注文を取りに来た時、ヴォルグは声

を出すことができなかつた。酒場の給仕娘が、なぜあの様な高度な法術を使えるのか。それもあつたが、どうにもそぐわないと感じた。給仕という仕事ではない。給仕としてこの店と客層に、だ。その丁寧で嫌みのない接客ぶりは、もつと上品な店でも充分通用するに違いない。

勿論、訊ねてはみた。

「ええ、覚えてます。あの時、心配して下さいました方ですよね」

ぺこりと一礼してみせた彼女は、しかし肝心の質問には答えてくれない。ただ、照れくさそうに笑ってみせるだけで、分かったのは結局シエラという名前だけだつた。

「どうぞ、ごゆっくり」

ヴォルグの眼前に手際よく品物を並べたシエラは、弾けるような笑顔を残して空いた卓の片づけを始めた。食べ残しをまとめ、うず高く積み重ねた木皿を抱えこむ。そして、いよいよ歩きだそうとした時に、短い悲鳴が上がつた。

「あ………！」

木皿の塔がゆらりと傾き、それを支える細い腕にたちまち激しい動揺が走る。だが、失いかけた安定を取り戻すのは、彼女にとって容易なことではないらしかつた。塔が揺れるのに合わせて、草色の服が右に左にと忙しなく動き回る。やがて、だらしなく通路に投げ出された太い足が、シエラの奮闘に終止符を打つた。小柄な身体が前のめりになつたかと思うと、崩壊した木皿の塔が傍らの卓へ倒れかかつていく。

「き、きやああ！」

肉の輪切りが宙を舞い、飛散したシチューが三人連れの男達を襲う。派手な

騒音と彼らの悲鳴に、店中の視線が事件の現場へ注がれた。

「た……、大変！」

頬を押さえて立ち尽くしていたシエラが、あたふたと跪く。そして、白い前かけを使つて三人の衣服を拭いはじめた。

「す、すみません。……大丈夫ですか？」

歪んだ笑みを見合わせる男達は、一様にくたびれた革鎧を着こんでいる。先ほど報酬がどうの商隊がどうのとわめいていたから、おそらくは同業者であろう。長靴の汚れ具合や日焼けした肌を見る限り、かなりの場数を踏んでいると思われた。

彼らが次々と浴びせかける言葉に、シエラは強ばった笑顔で応答している。

と、そのうちに、男の一人が彼女の頭に手を伸ばした。柔らかそうな栗毛を瘦けた頬に撫でつけ、さも楽しげな笑い声を上げる。シエラはそれでも笑みを保ち続けながら、懸命にその腕を払いのけようとした。その隙に、丸々と太った男が胸の膨らみを撫で回す。

「きや……！！ や、止めて下さい」

「ひやは！ けっこう大きいんだね」

残った大男は尻を狙ったようだったが、それは虚しく空振りに終わった。驚くほどの身軽さで立ち上がったシエラが、一目散に逃げ出したからである。

「はっはあ！ おい、姉ちゃん、ちよつと待ちなつて」

にやけた視線を送り合った男達は、次々と立ち上がってその後を追いつめた。

「い、いやあー！」

甲高い叫び声を残して、シエラは店の外へと飛び出していく。

「おいおい。洒落にならなくなってきたな」

立ち上がったヴォルグは、ぐるりと店内を見回してみた。だが、彼女を助けようという者など、他には誰もいないらしい。

「……仕方ないな。おい、勘定はここにおいとくぞ」

銀貨を無造作に投げ出すと、ヴォルグは剣を取って扉へと走った。



「あーあ。どうせなら、もつといい男に追っかけられたいもんだわね」

繁華街の雑踏を、シエラは軽やかに駆け抜けていく。振り返ると、彼らはまだしつこく追ってきていた。先頭の大男に突き飛ばされた通行人が、もんどりうって石畳に転がる。

「あらら、可哀想に。でも、仇は取ってあげるから、許してね」

こうでなくてはつまらない。見失われないよう、速度を加減した甲斐があったというものである。彼女は前かけを翻し、ようやくたどり着いたお目当ての通りへ飛びこんでいった。

そろそろ、けりをつけねばなるまい。このまま追いかけてっことを続ければ、いずれ息が上がってしまう。

周囲に店や人家の明かりはなく、石造りの倉庫だけが整然と建ち並んでいた。こんな夜遅くに彷徨っている者など、当然いようはずもない。

「さて、と。このへんで、たっぷりお返しさせてもらいましょうか」

幾つめかの十字路で、彼女は小柄な身体に急制動をかけた。そして、栗毛を

月光に煌めかせつつ、追いついてきた男達と対峙する。

「は、はは。やっつと、観念したか」

大男の苦しげな濁声を合図に、残りの二人が左右に分かれた。どうやら、三人がかりで道を塞ぐつもりらしい。

「失礼はお詫びします。ですから、もう勘弁していただけませんか？」

しおらしい物言いとは裏腹に、シエラの口元には不敵な笑みが浮かんでいる。だが、男達は、それにまったく気づいていない。両手を広げた痩せっぽちが、さも楽しげに肩を揺らす。

「許すも許さないもないでしょうに。私達はただ、一緒に遊んで欲しいだけです。ねえ、ゼス」

「そうそう。おいら達の部屋で、朝まで楽しくやろうぜえ」

ゼスと呼ばれた肥満体は、これみよがしに両の指を蠢かせてみせた。兄貴分らしい大男が、それを笑い混じりに一喝する。

「ばか野郎！ お前は俺とログの後だ。氣い失った女を相手にしてもつまらねえからな」

「ひやつはあ、そりや言ってます。あんまり重くて、潰れちまうってわけですか」

「ちえ、ひでえや」

彼らの会話を、シエラは黙って聞いていた。が、その顔からは、先ほどまでの笑みが消えている。

「下衆野郎……」

眉をひそめたシエラは、すり足で男達との間合いを広げていった。そして、

彼らの足が動き出すのと同時に、小声で法語の詠唱を開始する。彼女が選んだのは、地の法だった。数年前までは魔術とされ、忌み嫌われていた系統の術である。

《大地に眠りし我がアラナス。路傍の子らに命を宿せ……》

滑らかな旋律が、微かに唇から流れでる。だが、思わぬ邪魔者の出現によって、その詠唱は中断された。

「やめな、おっさん達。女の尻を追っかけるなんざ、いい歳こいてみっともないぜ」

ヴォルグである。振り返る男達に向かって、彼は大げさな抑揚をつけて言葉を繋げた。

「それに、その娘は俺の最煩なんでね。目の前でおもちゃにされちゃ、気分悪いんだよな」

あらぬ方向に向けた視線の意味を、どうやら察してくれたらしい。軽い一礼を残したシエラが、素早く傍らの路地へと駆けこむ。

「あ、兄貴！ 女が逃げちまいますぜ！」

ゼスの頓狂な叫びを受けて、大男の口元がにわかに緩んだ。

「いいから、放っておけ」

「追っかけないんすか？ きつと、まだ間に合いますよお」

「うるせえ、ほっとけって言うてんだ！ いきたきや、お前一人でいきな」
不意に荒げられた太い声に、ゼスの短い首がさらに縮まる。

「まあ、いいじゃねえか。もっと楽しい遊びが見つかったんだからよ」

その言葉が終わるよりも早く、大振りの剣が振り上げられた。丸太の如き腕

にみるみる筋肉が浮き上がり、ヴォルグを見据える眼に殺気が宿る。

「くきき……。確かに、ひと暴れするのもいいかもしれませんがねえ」

「それじゃ、せめておいらにやらせてくれよ。こいつ、せつかくの楽しみを邪魔しやがったんだ。どうしても、許せねえ！」

法杖を差し上げたログの前に、ゼスがそそくさと飛びだした。彼はその体型からは想像もできぬ軽快さで、たちまちヴォルグの眼前に迫ってくる。

「おらおら、いくぞお！」

「よ、よせよ。町中で殺傷ことは御法度だぜ」

大地を蹴って後退したヴォルグは、その瞳を素早くゼスの身体に走らせた。

所持する刃物は短剣だけで、四肢に小さめの手甲と臍あて。構えた拳にごつい鉄の輪をはめているところからすると、どうやら体術師であるらしい。

「止めろって。護衛者同士でやりあったって、仕方ないだろ？」

何の気なしのその言葉に、三人は意味ありげな笑みを送り合う。どういふつもりなのかは別として、退く気など毛頭ないのは確かなようだ。

「残念だが、俺らは流れなんぞな。甘ったるい仲間意識は、持たねえようにしてるんだ。……ゼス！」

「分かってるって！」

大男の呼びかけを合図に、鋭く踏みこんだゼスが拳を繰りだす。しかし、その先制攻撃は虚しく空振りに終わった。

ヴォルグは身をかわただけで、なおも剣を抜こうとしない。だが、軽く上げられた掌の周囲に、微かな変化が起きていた。月明かりに陽炎が揺らいだかと思うと、そのなかを小さな赤い粒が漂いはじめる。

「あれは……！ ま、待ちなさい！」

それに真っ先に気づいたのは、痩せっぽちのログだった。だが、興奮しきっている弟分には、その制止が聞こえていない。

「逃げようってのか、この野郎お！」

構えを取り直す彼に向かって、ヴォルグの腕が振り払われる。直後、放たれた赤い粒が炎を吹いた。それはみるみる拳大の球となり、火の粉を散らしてゼスの足下を襲う。

「う、ひゃ！」

四散する炎に、ゼスは思わずたじろいだ。瞬きから開放された瞳に、大きくヴォルグの姿が映りこむ。凍りつくような冷たい笑みを、せり上がってきた剣身が覆い隠した。

「良かったな。もし本気だったら、立派なお腹がざっくりだぞ」

「ひ……、ひ、い」

ゼスは必死の形相を浮かべて、間合いの外へ飛び退こうとする。が、それより早く、下腹部にヴォルグの長靴がめり込んだ。

「ぶぎゃー！」

豚の鳴き声のような響きを残して、丸い身体が石畳を転がっていく。

「消えろ！ お前らみたいなの見てると、殺してやりたくなるんだよ」

「ゲ、ゲルバン兄貴い……」

よろよろと起き上がったゼスの背中に、大男の掌が激しく叩きつけられた。

「この阿呆が！ あんな子供だましに引っかけかきやがって」

「だ、だってよお」

「情けねえ声出すんじゃないやねえ！ おいログ、分かってるな！」

「勿論。こいつと一緒にしないで下さいよ」

彼が法杖を差し上げるのを待って、ゲルバンは剣をゆっくりと直立させた。

月明かりを映す二振りの剣を挟み、静かな殺気の応酬が始まる。彼らは一定の距離を保ちながら、じりじりと相手の隙を窺っていた。

「消えるのは兄ちゃん、お前じゃねえのか」

声を張り上げたゲルバンが、幅広の剣身を振り下ろす。横っ飛びでそれをかわしたヴォルグの耳に、甲高い法語の詠唱が飛びこんできた。視界の端をちらちらよろしているゼスは、背後からの一撃を狙っているのだろう。

「くそつたれ！ 三人がかりかよ……」

さらなる打ちこみをヴォルグの剣が受け流した、その時である。

「おい、いたぞ！」

「こらあ！ お前達、何をやっとするか」

通りの入口で、聞き慣れぬ怒声が上がった。見ると、数人の男が、こちらに向かってくるではないか。お揃いの銀鎧を見れば、何者であるのかは明白だった。

「げ！ 憲兵だあ！」

もはや、喧嘩どころではない。もし捕らえられれば、冷たい牢獄と辛い労働が待っている。ゼスの頓狂な叫びに続いて、四人は蜘蛛の子を散らすように逃げだした。

「くくっ……。あははは！」

表通りの人混みで、栗色の髪が大きく揺れる。彼女がそこでずっと見ていた

ことを、勿論彼らは知る由もない。憲兵達をようやくまいてヴォルグが酒場に戻ったのは、夜もすっかり更けきってからのことだった。

「あの娘、無事に戻れたかなあ」

既に殆どの客は帰ってしまっており、卓上の杯やら皿やらが賑やかさの名残を残すのみである。見回してみると、シェラは店の隅で酔いつぶれた男を介抱していた。

「大丈夫ですか？ 今、水をお持ちしますね」

「ええつと……。まだ、いいかな？」

「申しわけありません。もう看板なんですよ……。あっ！」

ヴォルグの姿を認めるや否や、彼女はその表情をぱっと輝かせてみせる。

「いらっしやいませ！」

「いいのか？ もう終わりなんだろう？」

「はい。だけど、あなたは特別です。さ、どうぞ」

手近な卓についたヴォルグの前に、いつもより大きな杯が運ばれてきた。見ると、そこには赤葡萄酒がなみなみとつがれている。

「あれ？ まだ、何も頼んでないぜ」

「せめてものお礼です。先ほどは、本当にありがとうございました」

「あ、ああ」

眼前で深々と頭を下げられ、ヴォルグは思わず言葉に詰まった。下心あつての行為ではなかったが、さすがに悪い気はしない。相手がこの娘となれば、なおさらだった。

「それじゃ、遠慮なくいただくよ。俺、こいつには目がないんだ」

「やっぱり！　だって、いつも赤を頼まれますものね」

「へえ……。覚えてくれてるなんて光栄だな」

「勿論ですよ。それも、仕事のうちですから」

それから二人は、暫しお互いの身の上を語り合った。

聞けば、彼女は遙か南の国、レフィタル出身であるらしい。旅人向けの食堂を営む両親の元で幸せに暮らしていたが、十年前に起こった戦がそのすべてを奪っていった。独りでさまよっていたところを義父となる男に助けられ、それからずっと帝国各地を旅して回っているという。

給仕をしながら各地の料理を学び、いつか故郷に食堂を再建するのだと、彼女は瞳を輝かせて語ってくれた。

ほんの短い談笑ではあったが、ヴォルグにとってそれは実に楽しいひと時だった。元より好きなこの酒が、今夜はことさらに旨いと感じる。

「ヴォルグさーん！」

ほろ酔い気分で店を出たヴォルグを、弾んだ声色が呼び止める。振り返ると、シエラが手を振ってくれていた。躊躇いっつも上げた掌に、その口元から白い歯がこぼれる。

「ありがとうございます。どうぞ、お気をつけて」

そんな彼女にますます惹かれていくことを、ヴォルグははっきりと自覚していた。

鬱蒼とした木立を縫って、狼の遠吠えが響きわたる。広大な森の奥にぼっかりと空いた広場は一面、靄がかかった冷気と酒の匂いに覆われていた。

赤い炎の周りに粗末な天幕がいくつも張られ、その下で武装した男達がだらしなく寝そべる。そんななかで彼、ランガードは息が詰まりそうな緊張に耐え続けていた。垂れ下がった金髪が、視界の隅で微かに震える。

「お、お願いです。力を貸して下さい。僕は……、どうしても彼女を助けだしたいんです」

やつのことで絞りだした懇願に、禿げあがった初老の男が眼を閉じた。どっしりとあぐらをかいた男を見つめ、ランガードは溜まった唾をぐくりと呑みこむ。

「とびきりの獲物に、前払いの報酬。それに手みやげの酒、か。俺らにとっちゃ確かに美味しい話だな」

やがて笑いまじりのがらがら声が、重苦しい沈黙に終止符を打った。

「だがよ。それを鵜呑みにしろってのは、ちよつと無理があるんじゃないか？」

わざとらしい抑揚に合わせ、頬の十字傷が目まぐるしく形を変える。

「この間、旧知の仲間がこっぴどくやられてな。隠れ家を急襲されて、あつという間に一網打尽ってやつよ。聞くところによると、どうやら罠が潜りこんでたって話だぜ」

それが何を意味しているのかは、ランガードにも即座に理解できた。見当違いと分かっている、顔から血の気が引いていく。こめかみに軽い痛みが走り、視界が寸刻色あせた。

このままでは……、殺されるかもしれない。

「ま、待ってください！ 組合の登録証も、それに奴直筆の手紙だって見せたじゃありませんか。それでも……、それでも信用できないっていうんですか？」

「いや、おそらくは両方とも本物だろうな。だが、だからこそだ。いくらなんでも、出来すぎてるってんだよ！」

不意に鋭くなった語気に合わせ、刺青の入った腕が剣へと伸びた。

「……ひ！」

その声が洩れるより早く、切っ先が眼前を通過する。慌てて飛び退こうとするも、足がいうことをきかない。転倒したランガードは、後頭部を大地にしこたま打ちつけた。

「ひ、ひいい！」

「はっはあ！ どうやら演技じゃなさそうだな」

裏返った悲鳴を、すぐさま乾いた大笑いがかき消した。

「人間、咄嗟の時こそ本性が出るもんだ。その狼狽えぶりなら、間違いなく素人だろうさ」

嘲りとも感じられる声を浴び、潤んだ薄緑の瞳を怒りが過ぎる。しかし、ランガードはそれを懸命の作り笑いでごまかした。

「それじゃあ……、引き受けてくれるんですね」

「ああ、いいだろう。邪魔な護衛者なんぞ蹴散らしてやるからよ。大船に乗ったつもりでいるんだな」

「あ、ありがとうございます！」

なんとかうまくいった。ランガードの心に、成功の確信と安堵感が広がっていく。彼らが勝とうが負けようが、知ったことではない。要は、混乱を引き起こしてくればそれで良いのだ。彼の願いは、かけがえのない女性を再びその手に取り戻すこと。ただ、それだけだった。

翌朝、少々遅い時間に目を覚ましたヴォルグを、一人の男が訪ねてきた。とはいえ、面と向かって話をしたわけではない。

寝台を出た彼は、とりもなおさず板張りの窓へと歩み寄った。かんぬきを外してそれを開け放つと、たちまち眩しい陽光が差しこんでくる。

眼下の通りには食料品を扱う店が軒を連ねていて、夕方ともなれば主婦達の黄色い声で埋めつくされる。だが、仕入れの時間である今は、まだなんとも静かなものだ。

草の香りがする風を浴びながら、ときおり通り過ぎる荷車をぼんやり眺める。そんなのんびりしたひと時も、今日が最後になるらしい。窓の下に佇む男を見た途端、嫌な直感が心を走った。

「おはよう。いい朝だな」

「ええ、本当に。今日は、きつといい事がありますよ」

綻んだ男の顔立ちは、明らかに年下のものである。どこにでもある地味な服を纏い、一見するとごく平凡な若者であるかのようにだ。だが、それが作られた姿である事は、視線の鋭さからすぐに分かる。

「では、また近いうちに」

「ああ、そうなるだろうな」

当たり障りのない会話を終えて、ヴォルグは苦笑と共に窓を離れる。

「いいこと、ね」

ぶつぶつと呟きながら奥の扉に歩み寄ると、その隙間から一枚の羊皮紙が顔を覗かせていた。滑らかな筆跡に視線を走らせたヴォルグの口から、たちまち深いため息が洩れる。

「おいおい、今日出発だあ？　なんだよ、そりゃ」

急な話は毎度のことだ。どうせ断れなどしないのだから、早くても遅くても構わない。

いつもの彼なら、さっさとそう割り切っていたことだろう。だが、今回に限っては事情が違う。せめて、あの娘に別れの挨拶くらいはしていきたくった。

——畜生。この仕事が片づいたら、いっそ引越してきちまうか。

不可能な思いつきを反芻しながら、ヴォルグは急ぎ身支度を整える。そして、後ろ髪を引かれる想いでお気に入りの宿屋を後にした。

羊皮紙に記されていた仲介屋は、あっけないほど簡単に見つかった。

ベルダのそれは店の規模も、看板も、国都のものとは比べものにならないほど派手であるから、当然と言えば当然である。さすがに商人の街だけあって、護衛者を斡旋する彼らも相当羽振りがいいのだろう。

扉をくぐると、そこは大きな広間となっていた。壁に張り出された仕事の一覧に、たくさんの護衛者達が群がっている。剣をぶら下げた者や法衣を着こんだ者など、その容姿は様々だ。皆、真剣な表情で思案に思案を重ねている。へたな仕事を選んだり、実力以上の事をしようとするれば命にすら関わるから、考えすぎということはない。彼らにとって、これは非常に重要な決断なのである。

だが、今のヴォルグにその選択権は与えられていなかった。彼は一覧には目もくれず、まっすぐ奥の受付へと歩みよる。

「ええつと……。ハッグス商会の仕事を引き受けたいんだが」

「おお。じゃあ、あんたがヴォルグだね」

ヴォルグの申し出に、髭面の幹旋役が身を乗りだした。

「なんでも、今回は飛びつきりの荷だそうだね。腕の立つ護衛者を付けてくれと言われてるんだが、なかなか頭数が揃わなくて困ってたんだ。いいのがあるって話を持ちこまれた時は、藁をもすがる心地だったよ」

ヴォルグが差しだした羊皮紙の束をめくりながら、彼は満足げな頷きを繰り返す。

「ほお……。聞いた通りに、随分と大きな仕事をやってるね。これなら文句なしだ」

仕事を無事終えた護衛者達は、報酬と共に荷主の印が押された羊皮紙を受け取る。彼が手にしているのは、それを丈夫な紐で束ねたものだ。

「こちらの上前は、三割。払いは通例通り、むこうに着いてからだ。それでいいかい？」

「構わないさ。手数料が、ちよつと高い気もするけどな。それより、出発は今日だって？」

「ああ。もう少ししたら迎えが来るから、その部屋で休んでくれ。お仲間も、もう揃ってるはずだよ」

「了解。じゃあ、さっそく顔合わせを済ませるとしよう」

「それがいい。それじゃ、いい旅をな」

肩越しの声に、ヴォルグは左腕の楯を上げて応えてみせた。

「ちえ、よく言うぜ」

いい旅になどなるわけがない。もし、そうであるなら、最初から護衛者など必要ないのだから。彼はこみ上げてくる笑いかみ殺しながら、おもむろに扉の取っ手を引き寄せた。

窓一つないその部屋には、たくさんの卓がぎっしり並べられていた。落書きだらけの壁にキドロアの絵地図が張られており、それを蝋燭の灯がぼんやり照らし出している。

「お、いるいる」

この中に、たった数日間にせよ自分の命を預ける者達がいるはずだ。だが、これだけ多いと、さすがに区別がつかない。ならばこうするに限ると、ヴォルグはぐっと腹に力を入れた。

「おーい！ ハッグス商会のお守りはどこだい？」

響き渡った大声に、護衛者達が一斉に振り返る。だが、見渡してみても、手を挙げる者など一人もいない。

「あ、あれ？」

もしやよく聞き取れなかったのかと、ヴォルグがもう一度大きく胸を膨らます。すると、直下の卓から、覚えのある声色が聞こえてきた。

「うつるさいわねえ。耳が潰れたらどうすんのよ」

「……！ ほへ？」

一気に吐き出された息が、掠れた響きを作りだす。そこには、もう一度だけでも会いたいと思っていた、あの娘の姿があった。

「ま、まさか……、シエラ、なのか？」

「まさかとは、失礼ね。言っとくけど、私には双子の姉妹なんかいないわよ」

足を組んだ彼女は、さもおかしそうに両手で腹を押さえてみせる。前かけを革鎧に、スカートをズボンに替えたその姿を見れば、彼女がここにいる理由は明らかだった。

「ほら、ぼうつとしてないで座ったら？」

「あ、ああ」

「それにしても、あんたとまで一緒になるとはね。こりや、思ったより楽しい旅になりそうだわ」

「俺とまで？ どういう事だよ」

シエラはふんと鼻を鳴らすと、立てた親指で卓の向こうを指し示す。

「よお、昨日は楽しかったな」

「……！ あ、あんたら」

訝しげに視線を移したヴォルグは、またも言葉を失うことになった。そこでは夕べの男達が、にやにやとこちらを見つめていたのである。

「まあ、そう怖い顔しなさんな。つまんねえ事は忘れて、仲良くやろうぜ」

ゲルバンと呼ばれていた大男が、不敵な笑みを浮かべて右手を突き出す。躊躇いながらも応えると、痩せつぼちの法術師がそれに続いた。

「あんたは……、ロググだったな。可愛い弟分はどうしたんだ？」

「ああ、ゼスですか？ あいつは別の商隊ですよ。デロスで落ち合うことになってます」

「ふうん。こいつは……、ひよつとして当たりかね」

ヴォルグが洩らした呟きは周囲の喧噪にかき消され、仲間達の耳には届かなかった。

ほどなくやって来た迎えに連れられて、ヴォルグ達は昨夜の倉庫街へやって来た。あの静けさがまるで嘘のように、通りは数えきれない人や荷車で埋めつくされている。何度も蛇行を繰り返した末に、彼らはようやく目指す倉庫の前へとたどり着いた。

そびえ立つ石組みの壁に、帆船を型どった紋章が見える。この国の護衛者なら誰でも知っているだろう、ハッグス商会の標号だ。

デロス名産の塩から穀物、そして織物や家具に至るまで扱うハッグスは、護衛者達の良いお得意さんであるといえた。だが、あまりに強引な商売のせいか、巷での評判はすこぶる悪い。

五台の馬車からなる商隊は積みこみの真っ最中で、たくさんの人夫達が倉庫との間を行き来していた。声を張り上げてその指揮をとっていた男が、ヴォルグ達を認めて歩み寄ってくる。

「初対面ばかりだな。俺はジャゼリー、一応この隊の長って事になってる。デロスまでしっかり頼むぜ」

「よろしく隊長。さっそくだけど、積み荷を教えてくださいませんか。それによつて、術も選ぶ必要があるからね」

すつと進み出たシエラを見て、土色の顔から笑顔が消えた。

「……可愛らしいお嬢さんだな。いったい、誰の彼女だい？」

途端、その眼前に羊皮紙の束が突きつけられる。

「女だからって莫迦にしないで！ 信用できないっていうのなら、これを調べてみてちょうだい！」

「こ、こりや大したもんだ。すまなかつたな、お嬢さん」

ジャゼリーの謝罪は、そのままヴォルグの驚きを代弁していた。綴じられた証明書の厚さは、自分の倍ほどもあるだろうか。

勿論、仕事の数だけで力量を判断するわけにはいかない。だが、かなりの実績がなければ、あれほど多くの護衛を任せられはしないだろう。

「積み荷の殆どは、織物だ。ガイゼル中から集められた一級品のな。後は……」
振り返ったジャゼリーの眼前を、一人の娘が横切った。暫しの沈黙を挟んで、誰かがほおっと感嘆の声を洩らす。

すっと通った鼻筋と、健康的な桃色の唇。その顔立ちは、場違いとも言える魅力に満ちていた。艶のある黒髪が白い肌の美しさを際立たせ、澄んだ瞳が石畳の照り返しにきらきら輝く。

「皆さん、どうぞ宜しくお願ひします」

ヴォルグ達に向かつてぺこりと一礼し、彼女は俯きがちに馬車へと乗りこむ。唯一乗用であるらしいそれは、金や銀の織物で派手に飾りたてられていた。

「あの娘がそうなの？ いったい、誰よ？」

「ハッグス様の婚約者だ。くれぐれも、失礼がないようにしてくれよ」

彼女は名前をリ्यूジュといい、ベルダのとある商店の一人娘なのだという。彼女を見初めたハッグスは仕事そっちのけで求愛を重ね、遂にその心を射止めたのだそうだ。挙式日も正式に決まり、今回は先代への顔通しに赴くらしい。

「ふーん。人も羨む玉の輿ってわけね」

「だけど、それにしちや表情が冴えないよな」

「嫌なんじゃないの？ 本人は」

訝しげに馬車を見やるヴォルグに、シエラはあつけらかんと言いつつ放った。

「大体こういうのは、親同士で話が決まったりするもんよ。当人の気持ちなんて無視してさ。ね、隊長さん？」

「おいおい。あんまり人聞きの悪いことを言わんでくれ。それより、そろそろ出発だからな。準備しといてくれよ」

ジャゼリーは複雑な表情を残して、そそくさと積み荷の指揮に戻っていく。

「ほーらね」

シエラをしてやったりの表情に、ヴォルグは小さなため息を洩らすのみだった。

それから間もなく、商隊はデロスに向けて出発した。護衛者達に宛われた馬は、通例通り人数の三分の一である。昼近くになっての出発だったため、ヴォルグが鞍にまたがる頃には空が赤く染まりはじめていた。

やがてジャゼリーの指示が飛び、馬車は路傍に車輪を休める。すぐに炎が起こされて、夕食の支度が始まった。

虫達の賑やかな草原に、涼しげな月光が降りそそぐ。

車座となつての腹ごしらえが終わると、隊員達は三々五々馬車の中へと姿を消した。だが、ヴォルグやシエラにとっては、これからが本番である。盗賊達は、大抵の場合寝こみを襲ってくるからだ。

「そろそろ見張り交代だな。やっと眠れると思うと、ほつとするよ」

背中越しの呼びかけに、しかしシエラは座ったまま、振り向こうともしなかった。

「そう？ 私はまだまだ大丈夫だけど」

そう言ったきり、暗闇に青い瞳を巡らせている。

「それにしても、君が同業者だとは思わなかったよ。どうして隠してたんだ？」

「別に隠してなんかいないわよ。必要ないと思ったから、言わなかっただけ」

取りつく島もない反応に、ヴォルグは軽く肩をすくめた。とても、あの娘と

同一人物だとは思えない。

「給仕は辞めたのかい？」

「あれは臨時雇いよ。最初から、昨日までって話だったの」

「じゃあ、料理を覚えてるっていうのは？」

「いちいち、うるさいわねえ。勿論、嘘じゃないわよ」

となると、あの生い立ちも本当なのだろうか。聞かされて随分と同情したもののだが、ひよつとしてからかわれていたのではないかと思えてくる。

「……なに？ 私の顔に何かついてる？」

「いや、店にいる時とあんまり印象が違うからさ。どっちが、素顔なのかと思っつて」

「ははーん、ああいう性格が好みってわけだ。でも、おあいにくさま。あんなの作りに決まってるじゃない。仕事だからやってんのよ」

その大げさな物言いに、ヴォルグの神経は逆撫でされた。大人げないと思いつつも、ついつい言葉が刺を帯びる。

「なるほどな。いい娘だと思ってたのに、残念至極だよ」

「むかつくわね、その言い方。私はね、ただ仕事をちゃんとこなしたいだけ。

給仕の時も護衛の時も、ね。あんなだって、それで私を臍尻にしてくれたんでしょ？」

「ああ、そうさ。すっかり騙されてたってわけだよな」

「だます？ 騙すってなによ！」

天を仰ぐヴォルグに、シエラが詰めよる。その顔が真っ赤なのは、焚き火の炎のせいだけではなさそうだった。

「身体を張ってまでいいとこみせたのに、こんな女で残念だったわね。私に言わせれば、あんなの余計なお世話だわ！ あんたなんかに助けてもらわなくても……」

「こてんぱんだったってわけですか？」

甲高い問いかけが、シエラの怒声を遮る。振り返ってみると、ゲルバンとロツグが起きてきていた。

「その通りよ。せいぜい、このお節介野郎に感謝するのね」

「ええ、ええ。そうさせてもらいますよ」

「お勤め終了だ、お二人さん。続きをやるなら、どっか遠くでやってくれや。うるさくって気が散るからよ」

「悪かったわね。言っとくけど、私のせいじゃないわよ。仕かけてきたのは、そいつの方なんだから！」

憎まれ口を残し、シエラはさっさと走り去っていった。その背中を見やりつつ、ゲルバンが小さな口笛を鳴らす。

「分かんねえもんだなあ。夕べは、とびきりの上物だと思ったのによ」

「へえ……。あんた達でも、性格に拘ったりするのかい」

ヴォルグの皮肉に、彼は濁った笑い声で応えてみせた。

「そりゃあ、可愛げはないよりあった方がいいだろうよ。あの若奥様みたいに

な」

「ひひ、確かにそそられますね。言われるまでもなく、ヴォルグさんには感謝してますよ。また、別の意味でね」

——つたく、どいつもこいつも！

なおも何か言おうとする二人に背を向けて、ヴォルグは足早に馬車へと向かった。



翌日から、ヴォルグはシエラへの態度を改めることにした。今まで知り合ってきた護衛者達と同じく、あくまでも仕事仲間として付き合うことにしたのである。ある意味で諦めとも言えたが、そうしている限りはシエラもごく普通に接し、話してくれた。

考えてみれば、勝手に理想像を重ねていた自分が悪かったのかもしれない。それがどんなに不愉快なものかは、分かっているつもりだった。

剣技を学び始めたのは、家に並ぶ武具を実際に使ってみたくなったからだ。だが、今にして思えば、店の跡継ぎという枷への反発もあつたに違いない。

馬の手綱を操りながら、ヴォルグは幼少の日々へと想いを巡らせていた。と、後方から、シエラの馬がすうっと近づいてくる。自分と同じ毛色のそれを、彼女はたいそう気に入っているらしい。勝手にゼフィルとかいう名をつけて、ときおり何やら語りかけたりしている。

「あーあ。ひよっとして、デロスまでずっとこの調子なのかしら？」

「なにがだよ？」

「景色よ景色。どこまで行っても、草ばかりじゃない。いい加減に、退屈してきちゃうわ」

この国の生まれであるヴォルグにとって、街道沿いの景観はかなり変化に富んだものだ。林や森が点在しているし、それに村や畑といった人の匂いもある。

西部地方の単調さといったら、とてもこの辺りの比ではない。

「俺は好きだけどね、こういうの」

「どこが」 そうだ、一度レフィタルに行ってみればいいわ。ヌレイエフの泉くらい、あんだだっけ知ってるでしょ？ 夕陽を背にした巨大樹なんか、それは美しいんだから」

「巨大樹、ね。話には聞いてるけど、そんなに凄いのか」

「勿論！ あれに比べたら、ベルダのなんか雑草同然よ」

「へえ。だけどさ、仕事なんだからそれくらい我慢しろよ。夕べ、自分で言うてたろ」

淡々と窘められて、シエラの声がにわか一段高くなる。

「ふ、ふん。そりゃ、ただ眺めてるだけだったら飽きやしないわよね。そっち

こそ、ちゃんと仕事しなさいよ」

「なんだよ、それ？ まるで俺が怠けてるみたいない方じゃないか」

「だって、ぼんやりしてたじゃない！ 誰も見てないと思ったら、大間違いなんだから」

接し方を改めたとして、口喧嘩がなくなるわけではないらしい。ため息に続いて、ヴォルグの口がへの字に曲がる。既に名物となりつつある二人の戦いを、

他の護衛者達はただにやにやと見やるのみだった。

その日も翌日も、旅は至って順調だった。天候にも恵まれ、ヴォルグ達の出番もない。この調子なら、報酬の高さにそぐわぬ美味しい仕事になりそうだ。護衛者達は、互いにそう噂しあっていた。だが、招かれざる客は遂にやってきたのである。

それは、夜空に君臨した満月が、いよいよ地平線に沈み始めた時だった。見張りの叫びが、心地よい眠りをこっぴ微塵に吹き飛ばす。

「起きてくれ！ どうやら、お出でなすったみたいだぞ！」

慌てて馬車から飛び出すと、周囲で幾つもの薪の山が燃え上がった。闇に紛れる敵の姿を、浮かび上がらせるためである。馬達のいななきを浴びながら、仲間達も次々と駆けつけてきた。

「あそこだ！」

見ると、遥かに遠い林の前で、小さな光が瞬いている。眼を凝らしている間にそれはみるみる数を増し、やがて猛烈な勢いでこちらへと迫ってきた。

「ひ、火矢です！」

ログの叫びと同時に、あちこちで炎が飛び散る。ほとんどは地を焦がすだけに終わるなか、数本がみごと馬車の屋根に突き刺さった。慌てて隊員達がよじ登り、毛布でそれを消しにかかる。

「ち、結構考えてるじゃねえか」

ゲルバンの舌打ちを聞きながら、ヴォルグは腰の剣を抜きはなった。それから、前腕に固定した楯の革帯を確認する。

「たぶん、もう一度来るぞ。みんな、気をつけろ！」

相手は、商隊が荷を捨てられないのを知っている。まずは火によって混乱させ、その隙に攻めこんでくるつもりだろう。案の定、闇のなかでは、既に第二波がちらつき始めている。

「はん、なめんじやないわよ！」

身をかがめるヴォルグ達をしり目に、シエラが猛然と走り出た。

《吹きゆく風よ、ここに集え。大いなる主の許しを請うて、暫しその流れを我が意に委ねよ……》

突き出された両腕がやがて左右に分かれると、前方の草がざわりと鳴いた。

ヴォルグの脳裏に、ベルダでの彼女の姿が蘇る。

ちぎれた葉っぱや石ころが、みるみる上空へ舞い上がった。そして、もうもうたる土煙を纏った、巨大な渦が姿を現す。それは、飛来する炎を次々と吸い寄せ、呑みこんでいった。

「怯むな！」

「かかれえっ」

風音の向こうで、盗賊達の雄叫びが上がる。それを受けて、今度は両翼から伏兵が突進してきた。だが、ヴォルグ達に動揺の色はない。

「きひひ……、見え見えのやり口ですね」

すぐさま、ログの腕から青い火球が放たれた。さすが本職だけあって、ヴォルグのものより大きく、数も多い。瞬時に火だるまとなった敵が、悲鳴を上げて転げ回る。その横をすり抜けて、ゲルバンの猛撃が始まった。

「つりやああー！」

まっすぐ繰り出された切っ先が、革の鎧に突き刺さる。奇声を発して四肢をばたつかせる獲物を、ゲルバンは力まかせに蹴り飛ばした。栓を抜かれた傷口から、たちまち真っ赤な霧が噴き上がる。

「はっはあ！ 次はどいつだあ」

「……楽しんでやがる。ありや、本気だな」

彼らの戦いぶりに、ヴォルグは思わず顔をしかめた。その視界を、後ずさりしてきたシェラが横切る。

「前からもくるわよ！ 援護するから、あとは頼むわ」

「了解っ！」

彼は周囲の仲間を引き連れて、すぐさま敵の正面に躍りでた。

「あんた達は勝てないわ！ 死にたくなければ退きなさい」

眼前に迫った盗賊達に、シェラの警告が突きつけられる。しかし、彼らはそれを聞き入れようとはしなかった。打ちこみを受け流したヴォルグが、そのまま剣を一閃する。それを皮切りに、各所で激しい斬り合いが始まった。

こうして始まった戦いは、次第に一方的なものとなっていった。数で劣る護衛者達を、敵はどうしても抜くことができない。

苦し紛れに放った術はシェラ達によって尽く無効化され、浮足だったところにヴォルグ達が襲いかかる。ついには法術と剣の波状攻撃にさらされ、彼らは這々の体で逃げ帰っていった。

「これでよし、と。案外、簡単に終わったわね」

「やるじゃないか。さすがに、言うだけのことはあるんだな」

ヴォルグが突き出した拳に、シェラは慣れた手つきで応えてみせる。

「そつちこそ。お世辞にも、綺麗な剣さばきじゃないけどさ」

「……お前ね、一言多いんだよ。それじゃ、男にもてないぞ」

そう言い切ってしまったから、ヴォルグはひどく後悔した。予想通りに、にやりと笑ったシエラが目尻を上げる。だが、慌てて塞いだ耳に飛びこんできたのは、彼女の金切り声ではなかった。

「待てよ、この野郎！」

「なにやってんだ」 逃がしたら承知しねえぞ！」

振り返ってみると、馬車と馬車との間から若い男が飛びだしてきた。ジャゼリーの部下達が、必死の形相でそれを追う。

服を引く腕を振り払い、足下の石を投げつけ、男はなんとか彼らを振りきろうと試みた。だが、しよせんは多勢に無勢。草に足を取られたところを取り囲まれ、たちまち袋叩きはじまる。と、その喧噪の向こうで、リュージュの悲鳴が上がった。

「やめて！ もう、許してあげて！」

彼女は隊員達をかき分ける様にして、呻く男にその身を重ねる。主の婚約者が相手では、さすがに彼らも手出しができない。

「いったい、なんの騒ぎよ？」

間延びしたシエラの呼びかけに、ジャゼリーの興奮した表情が向けられる。

「この野郎、どさくさに紛れて馬車に忍びこもうとしてやがったんだ。リュージュ様、おどき下さい！ そんな奴を庇いだてする必要などありません」

「この人は私の、……友人なんです。どうか、見逃してあげて下さい」

リュージュの涙ながらの懇願を、しかしジャゼリーは聞き入れようとしな

った。

「それは出来ませんな。こいつは、関所で憲兵に引き渡します」

「ああ、ランガード。あなた、どうしてこんな事を」

「君を助け出すために決まってるじゃないか！」

跳ね上げられた男の顔を、赤い炎が照らしだす。ぼさぼさの金髪に、薄緑の瞳。顔立ちからすると、おそらくヴォルグやシェラと同年代だろう。腫れた口元をつたう血を、彼はごしごしと乱暴に拭いとった。

「君が犠牲になったって、誰も救われやしない。どうして、それが分からないんだ」

「言ったでしょう。もう、私のことは忘れて。でないと、あなたまで巻きこまれるわ」

「おい、お前ら！ 早く奥様をお連れしろ」

か細い涙声に、ジャゼリーの指示が重なる。両脇を抱えられるようにして、彼女はランガードから引き離された。

「待って！ もう少しだけ、話させて下さい。お願いします」

身をよじって抵抗するも、二人の男相手ではどうしようもない。と、そこにヴォルグが立ちはだかった。

「少しくらいいいじゃないか。気の済むようにしてやれよ」

腕の締めつけが緩んだ隙に、彼女は必死の形相でランガードの元へ舞い戻る。

「おい、勝手なことをしないでくれ。あんたらには関係ないことだ」

「そう、堅いこと言うなって。ちよっと話が聞きたいだけだよ」

「冗談じゃない！ 駄目と言ったら駄目だ」

ジャゼリーは声を荒げ、強引にヴォルグの前へ回りこもうとした。その視線が、突如赤いリボンに遮られる。

「ぴいぴい、うるさいわね。なんなら私が黙らせてあげましょうか？」

「……う」

「ごめんね、隊長さん。本当は、あんまり気乗りしないんだけど」

——あんたのせいだからね、このお節介！

彼女は眉をつり上げて、眼前の背中に拳をぶつけた。だが、ヴォルグは、それを気かけようともしない。

「どうも、訳ありみたいじゃないか。よかったら、詳しい話を聞かせてくれよ」

穏やかな呼びかけに、リュージュの唇が微かに動いた。それを、慌てて立ち上がったランガードが制する。

「君の立場が悪くなる。僕の口から話すよ」

「あらあら、格好つけちゃって。自分の立場が分かってるのかしら」

「ああ、分かってるよ。あんな奴に雇われてる、莫迦な護衛者と違ってね」

「な、なんですって!」

詰め寄ろうとするシエラの肩に、素早くヴォルグの手が伸びる。その圧倒的な力に、彼女は身動きがとれなくなった。

「痛っ！ な、なにすんのよ!」

「気にしないでくれ。こいつ、ちょっと遠慮を知らないところがあるからさ」

「こらあ！ 分かったようなこと言っていないで、離してよ!」

喚きちらすシエラを睨みつけながら、ランガードは事のいきさつをぼつりぼつりと話し始めた。

彼の両親はベルダにほど近い村で、織物の仲買をして暮らしていた。父の信用と取引先を引き継いだのは、今から三年ほど前のことである。その挨拶に訪れたルドック商店で、彼は初めてリ्यूージュに出会った。

はじめは、取引先の箱入り娘という意識しかなかった。だが、幾度となく荷を届けているうちに、いつしかその魅力と優しさに惹かれていった。そして、ある日、彼は遂に交際を申しこむ。

「たぶん駄目だと思ってた。僕みたいな貧乏人を、受け入れてくれるわけがないってね。彼女が泣きだした時は、心臓が止まるかと思ったよ」

ランガードの掌が、リ्यूージュの震える指を包みこむ。それをきゅっと握り返し、彼女はゆっくりと顔を上げた。

「とても、嬉しかったんです……。私は、その事をすぐに両親に伝えました。二人とも、彼をすごく気に入っていましたから。あんなに真面目で、働き者の青年は他にいないって」

両親の祝福を受けた彼らが将来を約束しあうのに、さほど長い時間はかからなかった。まさに幸せの絶頂だったが、そこに思わぬ邪魔者が現れる。それが、ハッグス商会の二代目だった。

商談の席でリ्यूージュを見初めたハッグスは、その場で彼女との婚約を願っていた。やんわりと断る父、ルドックに、彼は大人げなく怒りを露にしたという。

ベルダに滞在している間、彼は毎日のように店を訪れ、リ्यूージュにしつこく迫り続けた。デロスに帰ったと聞いてほっとしていると、今度は大量の手紙が送りつけられてくる。リ्यूージュがそれを拒み続けたのは、いうまでもない。そして、脅迫が始まった。

「ルドックさんが買いつけた品を横取りしたり、無茶な安値をつけてお客を奪ったり。あいつは……、最低だ！」

「こんな脅しに負けるものかと、父はそう言ってくれました。でも、戦う手段などにもなくて……。結局、どうにもならないところまで追いつめられてしまったんです。それでも、たとえ店が潰れても守ってみせるよって母が……。それを聞いて、私はあの人の元に嫁ごと決心しました」

「金に物を言わせて、むりやり彼女を連れ去るなんて。そんな事が認められると思うか？ 指をくわえて見ているなんて、僕にはできない！」

「まるで負け犬の遠吠えね。あんたが認めなかったって、現に店は傾いているんじゃないよ？」

「お、おい。よせよ」

制止しようとしたヴォルグの腕を、シェラは乱暴に振り払った。そして、ラングードの胸元に人差し指を突き立てる。

「それにね、私はお金だって魅力の一つだと思うわよ。無いよりも有った方がいいに決まってる。それは、間違いないことだもの」

「……奴の方が、リ्यूージュを幸せにできるっていうのか？」

「さあね。ただ、そうなる可能性もあるってことよ」

「そんなことあるもんか！ ……あんたには分からないんだ。人を殺すことは慣れてても、好きになったことなんてなさそうだもんな」

「か、勝手なこと言わないでよ！ 私のこと、知りもしないくせに！」

「知らなくたって、見てりゃ分かるさ」

取っ組みあわんばかりの二人を、懸命にヴォルグとリ्यूージュが引き止める。

今回のデロス行きを知って、ランガードは一計を案じた。盗賊を雇おうというのである。彼らに連れ去られたと見せかければ、ハッグスも結婚を諦めるに違いない。万一そうならなかったとしても、家柄や対面が許さなはずである。決意を固めたランガードは、すぐに手持ちの商品を売り払った。盗賊への報酬は、その殆どに加えて商隊の積み荷のすべて。彼は数日に渡って山中を放浪し、ようやく目指す相手との接触に成功する。

「畜生！ もうちよつと……、もうちよつとだったのに！」

震える叫びを夜空に向けて、ランガードは大きく腕を振り上げた。大地へ打ちつけられる拳に、リ्यूジュが身体ごとすがりつく。

「そうか。そういう事だったのか……」

話を聞いて、ヴォルグはこの若者への同情を禁じえなかった。これが吟遊詩人の歌だったなら、素直に彼の勝利を願っていたに違いない。だが、これは現実であり、自分は当事者の一人なのだ。

「ふーん、事情は分かったわ。だけど、諦めなさい。助けてはあげられないし、そうするつもりもないから」

彼がやつとの事でたどり着いた結論を、シエラはいささかも躊躇わずに言い放った。

「いい？ この商隊を、無事デロスまで送り届けること。それが、私の仕事なの。彼女を逃がせば私……、私だけじゃなく仲間達や仲介屋の信用に関わる。それくらい、あなたにも分かるでしょう？」

ランガードの恨めしげな視線を受けて、その声は徐々に荒げられていく。

「なにより気に入らないのはね……。事情はどうあれ、私達を殺そうとしたっ

てことよ。そりゃ、あんたは彼女を助けるためなら、他人なんてどうでもいいのかもしれない。だけど、こっちにしてみたらいい迷惑だわ。冗談じゃないわよ！」

「申しわけありません。おっしゃる通りだと思います」

顔を背けるランガードの傍らで、リユージュが深々と頭を下げた。

「でも……。でも、本当に悪いのは私なんです。私がいつまでも未練を残していたから、彼も諦めがつかなかったんです。ですから、どうか彼を、ランガードを許してやって下さい」

涙でぐしゃぐしゃの美顔から、シエラの瞳がふらりと離れる。

「分かったわよ。だから、顔を上げてちょうだい」

「えい。そ、それじゃあ」

「彼女の想いに免じて、今日のところは見逃してあげる。でも、また邪魔をしたら、今度は遠慮なく殺すわよ。さあ、さっさと消えなさい！」

乱暴な促しに、ランガードはうなだれたまま踵を返した。

「さようなら。あなたのこと一生忘れないわ」

「さよなら、だつて？ ……そんなの嫌だ。僕は絶対に諦めないよ！」

走り去る彼を、リユージュは言葉もなく見送っていた。丸められた背中 of 震えにあわせ、小さな嗚咽が聞こえてくる。

「なあ。もうちょっと、優しくしてやってもいいんじゃないか？ 可哀想な話じゃないか」

ヴォルグの囁きに、シエラは荒々しく足下の草を蹴り上げた。

「じゃあ、どうしろつていうの？ 悪者扱いしないでよ」

事態が一段落したのを見て、皆がそれぞれの寢床へ戻りはじめる。東の空に薄明が広がったのは、それから間もなくしてのことだった。



少し遅めの朝食の後に、商隊は野営地を後にした。ジャゼリーによれば、明日の昼にはデロス国境へ到着できるらしい。

遙かな草原の街道を、馬車は今日もゆっくりと進んでいた。街道とはいえ、しよせんは踏み固められただけのものである。馬車自体の強度はもとより、積み荷や搭乗者のためにもあまり速度は上げられない。今回は、荷主の婚約者が同行しているのだからなおさらだ。

最後尾に行く馬車の荷台で、ヴォルグは剣の手入れに勤しんでいた。その隣では、シエラが流れ行く路面を眺めている。

「……あいつ、まだいるぜ」

忙しく剣身を行き来していたぼろ切れが、やがてその動きを止めた。

「言われなくなつて、ちゃんと見えてるわよ」

彼らの視線の先には、馬にまたがる若い男の姿があつた。紛れもなくランガードである。出発して間もなく、彼は遠方の林から現れた。そして、それからずっと、つかず離れず後ろをついてきている。

「まったく、しつこいったらありやしない。いつそのこと、術で吹き飛ばしてやろうかしら」

「そういうなよ。あいつなりに必死なんだろ」

やんわりとした窘めに、シエラの首が静かに回る。ヴォルグの顔をまじまじと見つめつつ、彼女は何事か思索している様子だった。

「まさか……、妙なことを考えてるんじゃないでしょうね？」

「ああ？ どういう意味だよ」

「そうねえ。たとえば、彼女をさらう手助けをしてやろうとか」

「ば、ばか言うな。俺だって、護衛者の端くれだぜ」

勿論、嘘ではない。夕べの彼女の言動も、護衛者として当たり前だったと思う。だが、指摘がまるっきりの外れかというのと、決してそうではなかった。

「ふーん。じゃあ、なんであんなこと言ったのよ？」

「……？ へ？」

「助けるつもりがないのに、助けられもしないのに、どうして情けなんかかけたの。事情を聞こうが聞くまいが、結果は同じだって思わなかった？」

それはこれまでの口論とはまったく違う、感情を押し殺した問いかけだった。真摯な、そしてどこか哀しげな表情に、思わず視線が引きつけられる。

「同情するのは、とても簡単なことよ。でも、それだけじゃ、なんの救いにもなりはしないわ。うわべだけの慰めや束の間の希望が、どれだけ相手を辛くさせるか考えてみて」

と、そこでシエラは何か気づいたようだった。みるみる露となった動揺を、ぎこちない笑みが覆い隠す。

「ご、ごめん！ ちょっと、疲れてるのかもしれないな」

彼女はほのかに顔を赤らめつつ、上擦った声で言葉を繋いだ。

「でも、気にしないで。今晚、ゆっくり眠れば大丈夫よ。いくらなんでも、昨

日の今日で夜襲もないでしょうしね」

「ああ、そうだな。二晩続けてつてのは、勘弁してほしいよ」

軽く微笑んでみせながら、ヴォルグは手元の剣を見下ろした。磨き上げられた剣身に、馬上のゲルバン達が映りこむ。ヴォルグは心の中で、もう一度同じ台詞を彼らに向けた。だがその晩、不幸にも悪い予感は的中してしまう。

夕食を終えた護衛者達はいつも通りに見張りを残し、馬車で毛布にくるまった。事が起こったのはそれから暫くの後、皆がすっかり寝静まった頃のことである。

「……ぎゃー！」

小さく届いた悲鳴に、ヴォルグはむくりと身を起こした。垂れ幕越しに耳をすませてみたが、草のざわめきが微かに聞こえるだけだった。先ほどまであれほど賑やかだった虫達も、いつの間にかすっかり沈黙してしまっている。

「みんな、起きろ！」

激しく身体を揺すられて、仲間達は次々と飛び起きた。寝覚めの良さは、彼らの職業病といっても良い。

「どうした？ 何かあったのか」

「さっき、外から悲鳴が聞こえた。それに、妙に静かすぎると思わないか？」

暫し顔を見合わせあった後、彼らは一斉に荷台から飛びだした。と、赤々と燃える焚き火のわきに、二人の見張りが倒れている。

「おい、どうした？」

慌てて駆け寄ってみても、彼らはぴくりとも動かない。抱き起こした身体から、多量の鮮血が迸る。

「や、殺られてる!？」

「こいつはやばいぞ！」

仲間を悼む暇もなく、彼らは直ちに行動を起こした。急を知った仲間達が集まるなか、各所で薪に火が放たれる。それはみるみるうちに強さを増して、夜陰を遥か遠くへと押しつけた。

「な、なによこれえ！ あんた達、いったい何やってたの!？」

シエラが浴びせる金切り声に、無論見張り達は応えない。

彼女の瞳が捉えたものは、草を蹴って突っ込んでくる盗賊達の姿だった。横一列となったその数は、こちらを明らかに上回っているだろう。

すっかり虚を突かれた護衛者達は、もはや態勢を整えることすらできなかつた。真夜中の草原を、たちまち生血の匂いと我鳴り声が埋めつくす。

「つやあ！」

剣を一閃したヴォルグの顔に、生温い液体が噴きかかった。それを乱暴に拭いつつ、彼はゲルバンとロググの姿を探し求める。

彼方では、シエラの放った突風が何人もの敵をなぎ倒していた。不利な状況に変わりはないが、戦況自体は五分五分というところだろう。戦いながら少しづつ集結していく自分達に、敵は突破口を見いだせずにいるようだ。

この調子なら、いずれ諦めさせることが出来るかもしれない。ヴォルグの心を、そんな微かな期待が過ぎった。とはいえ、それも予測が外れていればの話である。

何人もの敵を斬り捨て、蹴り倒した末に、彼はようやくお目当ての巨体を見つけた。そして、同時に恐れは現実のものとなる。突如身を翻したゲルバ

ンが、共に戦っていた仲間を襲いはじめたのだ。空気を震わす断末魔に、濁った高笑いが重なる。

「おっさん、やめろ！」

「お、来たか。それじゃ、さっそくあの晩の決着をつけようぜえ」

ヴォルグに向かって、すぐさま大剣の切っ先が突きだされた。

「こいつは俺がやる！ お前ら、手出しすんじゃねえぞ」

どこか楽しい一喝に、周囲の盗賊達が後ずさる。それは、まさにゲルバンの立場を物語る光景だった。おそらくは、ロググもどこかで仲間を手にかけていることだろう。

「……いつからそっちの味方になったんだよ」

「はっはあ！ この期に及んで、まだそんなこと言ってやがるのか」

迫ってくるゲルバンを睨みつけ、ヴォルグは愛用の剣をゆっくりと構えなおした。

「最初から見当はついてたさ。ちよっと聞いてみただけだよ」

彼を殺してしまうわけにはいかない。手加減して勝てるかどうかは分からないが、指示に逆らえば後々面倒なことになるだろう。

思わぬ裏切り者の出現に、護衛者達は大混乱に陥った。開いた間隙にたちまち敵が殺到し、集結しかけた彼らを再び二つに分断する。戦局の平衡は、遂に大きく崩れはじめた。

「み、味方をやるなんて、一体どういふつもりよ！」

リュージュの乗った馬車を背に、シェラが声を張り上げた。怒りに燃えた視線の先で、ロググが唇を歪ませる。剣の響きと怒号のなかで、冷たい殺気が行

き交った。

「味方？ 誰が、誰のです？」

「ふーん、そういう事だったの。……よくも騙したわね」

「違いますよ。あなた方が、勝手に決めつけていただけでしょう？」

「な、なんて言いぐさよ！ もう、絶対に許さないから！」

叫んだシエラの唇が、そのまま忙しない開閉を継続する。すると、彼女の周囲に、陽炎の如き揺らめきが湧きおこった。それはみるみるうちに激しさを増し、やがて長い栗毛を頭上へと持ち上げる。

「面白い！ 望むところですよ」

ログスが腕を差し上げた直後、両者の中央で異種の法がぶつかりあった。巻き上がった土埃と渦巻く炎とが相手を呑みこもうと捻れ、のたうち、遂には激しく弾け飛ぶ。その衝撃に、周囲で幾つもの悲鳴が上がった。

「ほほお、まったくの互角とは。あなたも、なかなかのもんですね」

爆煙の向こうから、笑いまじりの感嘆が届く。それを無視して、シエラは次なる詠唱を開始した。

《すべてを支えし大地の神よ。その戒めを我、今こそ解き放たん。我が敵を贅として、東の間の休息を得るがいい……》

流れるような旋律は、しかしそこで中断された。不意に脇腹を激痛が走り、飛翔の時とは違った浮遊感が広がる。練り上げた気はたちまち霧散し、彼女は頭から地上にたたきつけられた。

「ぎゃ、ん！」

「ひよお、あの時の姉ちゃんじゃねえか！ なんでこんなところにいるんだよ？」

涙に霞んだ視界に、ゼスがぬっと顔を突き出す。ゆっくり迫ってくる腕の先で、手甲が鈍い輝きを放っていた。

「驚いたでしょう？ この娘、とんだ食わせ者ですよ。実はこれが本職で、しかもとびきりの跳ねっ返り。千年の恋も醒めるってもんです」

「へええ、そうなのかい。まさか、あの可愛らしい娘がねえ」

リボンの結び目を掴んだ腕が、強引にシエラの上半身を引き起こす。

「は、離して……。離しなさいったら」

身体中を舐めまわす視線に、背筋を悪寒と恐怖が走り抜けた。精いっぱい抵抗するも、四肢に力が入らない。

「じゃあよ、もう俺がもらってもいいよなあ？」

「好きにすればいいでしょう。私達は、他に上物を見つけましたから」

「やったぜ。これで暫くは楽しめるってもんだ」

苦痛に歪む顔を覗き込み、ゼスは大げさに舌なめずりをしてみせる。だが、それに、ロググの反応はなかった。

「……？ あにき？」

何の気なしに上げた視界の先で、痩せぎすの身体がゆっくりと崩れ落ちる。

そしてその向こうには、忘れもしないあの男の姿があった。

「なんだよ、お前までいたのかあ」

ぎらりと眼を光らせる彼に、ヴォルグの歪んだ表情が返される。

「シエラを離せ。言っただろ、そいつは俺の最良だって」

ゲルバンを失神させるのと引き替えに、彼は使いこんだ楯を失った。力なく下げられた左腕からは、絶え間なく赤い滴が落ちている。

「ああ、いいともさ」

彼女を傍に放りだし、ゼスが拳を構えた。笑いまじりのその声は、勝利の確信に満ちている。

「ただし、俺に勝てただけだな！」

滑るように近づいた肥満体から、鋭い拳撃が放たれた。辛うじて身をかわしたヴォルグに、今度は極太の向こうずねが襲いかかる。剣で受け流しはしたものの、あまりの衝撃と傷の痛みには彼はよろよろと後ずさった。と、その背中を何か柔らかく受けとめる。ちらりと振り向けた視線の先で、シエラが小柄な身体を弓なりにさせていた。

「ほら、しっかり！」

「お、どうやら大丈夫そうじゃないか」

ヴォルグの強がりに、すぐさま真顔の頷きが返される。

「へっちゃらよ。でも、あんたはそうじゃないみたいね」

脇腹の鈍痛に耐えながら、彼女は亡き義父のことを思い出していた。

あの時もそうだった。法の力を過信した、愚かな娘。その命と己の命を、ゼフィルは躊躇うことなく引き替えた。そうして、独りぼっちの生活が始まったのだ。

「私が術でなんとかするわ！ だから、もうちよつとだけ頑張つて」

「任せとけ。ただし、くれぐれも無理はするなよ」

ヴォルグはそう言い残すと、片手でゼスに斬りかかっていった。革鎧の背中を見つめ、彼女はすぐさま法語の詠唱を開始する。すると、その指先に、光の粒がまとわりつき始めた。それは向かい合わされた掌の間で浮遊と融合を繰り返

返し、ほどなく白銀に輝く球となる。

「いっけえっ！」

ヴォルグが拳に飛ばされた一瞬をついて、彼女の腕が振り払われた。雷電を伴った光球が、まっすぐにゼスの元へと突き進む。

「う、お？」

ヴォルグにのしかかろうとしていた彼は、しかしすんでの所でそれに気づいた。丸い身体が軽やかに飛び退いて、向かってきた光球をやり過ごす。だが、直後に頓狂な悲鳴が上がった。

「な、なんだこりゃあ？」

光は大きく空中で旋回し、再び彼に襲いかかってきたのである。速度が落ちていたため、避けること自体は簡単だった。が、かわしてもかわしても、攻撃は止まない。そして、何度めかの跳躍をしようとした時、不意になにかが足を押さえた。

「疲れたる？ 遠慮しないで、そろそろ休めよ」

眼下で、横たわったヴォルグが笑っている。その剣が足の間に差しこまれていることを、そこでようやくゼスは悟った。慌てて振り払った手甲に、加速した光球が吸いついてくる。

「ふぎやあつ」

青白い閃光が続いて、鈍い衝撃音が轟いた。焦げ臭さの漂うなか、髪を逆立てたゼスが前のめりに倒れこむ。息はしているようだが意識はなく、ただ四肢をぴくぴくと痙攣させるだけだ。

「便利な術だな。今度、俺にも教えてくれよ」

血の気が引いた笑顔に、シエラは強ばった表情で答えてみせる。

「ええ、いいわよ。ただし、生き残れたらだけどね」

気がつくのと、周りを盗賊達を取り囲んでいた。先ほどの閃光が、彼らを呼び寄せてしまったらしい。背中を合わせた二人に向けて、包囲の輪がじりじり狭められていく。

「……絶体絶命ってどこね」

「おいおい、諦めるなよ。いつもの威勢はどうしたんだ？」

だが、そんな励ましとは裏腹に、ヴォルグは死を覚悟していた。出血のせいか、膝が笑っているのを感じる。片腕の使えない状態では、万に一つの勝ち目もないだろう。

それなら、せめてシエラだけでも……。

そう決断を下すのに、さほど時間はかからなかった。

「俺が突破口を開く。そうしたら、とにかく走れ」

「ちよ、ちよっと。それじゃ、あんたはどうなるのよ」

「向こうに抜けたら、術でこいつらを吹き飛ばしてくれ。なあに、それくらい持ちこたえてみせるさ」

「だ、駄目よ、そんなの。間に合うわけないじゃない」

上擦ったシエラの声に、ヴォルグの背中が細かく揺れる。

「はは、お前の腕ならきつと出来るさ。さ、いくぞ！」

大きく剣を振り上げ、ヴォルグは精いっぱい咆哮を敵にぶつけた。と、力強いときの声がそれに応える。

「……………え？」

思わず向けた視線の先に、ヴォルグは信じられぬものを見た。馬にまたがった同業者達が、猛烈な勢いで近づいてくるのではないか。そして、その先頭では、ランガードがこちらをまっすぐ指さしていた。

戦いの結末はこれで決まった。思わぬ新手の出現に盗賊達はただただ狼狽え、逃げ出しはじめる。そして間もなく、草原に元の静寂が戻ってきた。

「おかげで助かったよ。だけど、いったいどうして？」

ヴォルグの問いかけを受けて、ランガードは無表情に事の次第を教えてくれた。

闇に紛れてリュージュを助け出そうとした彼は、偶然にもゲルバンとログの会話を聞いてしまったらしい。そして、その内容に仰天し、すぐさま後続の商隊に助けを求めたのだそうだ。

「あ、ありがとう。一つ、借りができちゃたわね」

シエラがおずおずと差し出した手を、しかし彼は乱暴に払いのける。

「僕はリュージュのためにやったんだ！ あんた達が負ければ、彼女はきっと慰みものにされるだろう。そうなるくらいなら、今の方がまだましじゃないか！」

鋭い語気を浴びせかけられ、シエラは何も言い返せない。唇を噛みしめて、ただただ俯くのみだった。

「どうする？ 彼女に……、会っていくか？」

その申し出に、しかしランガードは無言で首を振ってみせる。

「遠慮しとくよ。会ったって、辛くなるだけだから」

その後、捕らえたゲルバン達を馬車に押しこみ、死者の埋葬を済ませたところ

ろで、ヴォルグ達の仕事はようやく終わった。

遙かに続く草原は、翌日も穏やかな晴天に恵まれた。澄みきった空から鳥達のさえずりが降りそそぎ、微風がさわさわと頬をくすぐる。わき上がってくる眠気を堪えつつ、ヴォルグはのんびり手綱を操っていた。

あの激しい戦いの中、リ्यूージュに何事もなかったのは幸いだった。積み荷に若干の被害が出たものの、ジャゼリーはなによりそのことを喜んでいて。とはいえ、荷主のハッグスもそうかどうかは分からないが。

デロスへの関所は、もうすぐそこだ。仲間は半減してしまったが、ここまで来れば襲撃の心配もないだろう。次の街で補充が済めば、取りあえずは一安心である。となると、気にかかるのはシエラだった。

お気に入りの馬にまたがった彼女は、先ほどから頻りに後ろを振り向いている。その瞳の先には、今日もまたランガードの姿があった。

今朝になってから、彼女の口数は極端に減っている。浮かぬ顔で考えこみ、こちらの挑発もどこ吹く風だ。あれほど気に障った口喧嘩だが、いざ起こらないとなると物足りなかった。

「どうした。少し堪えたか？」

「んー、そうかもしれないな。あれだけ好き勝手言った相手に助けられちゃね」
返された声に、張りが無い。やっぱりそうかとヴォルグは思う。

——元気だせよ。お前らしくないぞ。

そう励ましかけようとしたところで、彼の心を躊躇いが走った。それが、シエラの言う「うわべだけの慰め」に感じられたのである。そもそも、彼女らし

さとはいったいなんなのだろう？

「あ、あのさ。夕べのことなんだけど……」

揺れる栗毛を眺めていたヴォルグは、そんな呼びかけで我に返った。

「へ？」

「本当に感謝してるわ。あのままじゃ、私きつとやられてた」

「気にすんなって。お前流に言えば、それだって仕事のうちだろ？」

再び黙りこくった彼女が、上目づかいにヴォルグを見つめる。

「仕事、かあ。ベルダの時とは違うんだ？」

「おいおい、今さら蒸し返さないでくれよ。余計な手出ししちまったのは、謝るからさ」

「違う、違う。そういうつもりじゃないの」

ヴォルグの視線の先で、小ぶりの掌がひらひら揺れた。

「あの時、本当はちょっと嬉しかったのかもしれないなって。ま、よくは覚えてないんだけどね」

「お前ね。そういうのは、ちゃんと覚えとくのが礼儀だぞ」

「……ごめん」

ヴォルグの仕掛けに、やはり彼女はのってきけてくれなかった。だが、やがて、閉じられた唇から小さな笑いが溢れだす。

「それより、怪我の調子はどうなのよ？」

「すっかり元通りさ。お前の《治癒》の術のおかげだよ」

「本当？ 平気そうな顔して、実はやせ我慢してるんじゃないの？」

「そんなことないさ。この通りにね」

そう言うが早いが、ヴォルグは左腕をぐるぐると回し始めた。

「ちよ、ちよっと！ やめなさいよ、子供じゃないんだから」

だが、一向に彼の腕は止まらない。

「もう！ 馬から落ちたって知らないわよ！」

悪戯小僧を諭すが如き窘めに、周囲の仲間達から笑いが洩れる。それは次第に大きくなり、やがて商隊中へと広がっていった。

それから間もなくして、彼らは無事に国境へと到着した。関所の敷地は、丸太組みの壁にぐるりと取り囲まれている。この中で証明書と積み荷の審査を済ませれば、いよいよデロスに入国だ。

番兵に連れられて門をくぐると、そこは大きな広場となっていた。既にかのりの商隊が到着しており、手続きの順番を待っている。

かなり待たされそうだと聞かされて、シエラは暫し辺りをぶらつくことにした。ひしめき合う馬や荷車、それに人々の間をすり抜けて、なんとかガイゼル側の門へとたどり着く。と、そこで、なにやら騒ぎが起きていた。

「頼むよ。この通りだ」

懸命に頭を下げるランガードを、数人の番兵が取り囲む。

「何度同じ台詞を言わせるんだ」証明書を持たない者を、通せるわけがないだろう」

「ああ、分かってるよ！ だけど、それでも僕はデロスに行かなきゃいけないんだ。お願いだから、通してくれ！」

声を嗄らしての懇願に、しかし兵達は力で応えた。抵抗する彼の腕を捻り上げ、腹部へ立て続けに拳をみまう。ぐったりしたランガードの口から、黄色く

濁った液が飛び散った。

「あ……！」

咄嗟に助けに入ろうとしたものの、シエラはわずか数歩で立ち止まってしま
う。

旅行者の証明を所持していないなら、自分が行ったとてなんの力にもなれは
しない。それどころか、仲間と見られとばつちりを喰う恐れすらある。そんな
情報が仲介屋に広がれば、たちまち護衛者廃業だ。

「いい加減に諦めなさいよ」

彼が引きずられていく様を、シエラは唇を噛みしめて見つめていた。と、そ
の視野の端を、ぞろぞろと行列が行きすぎる。何の気なしに瞳を向けて、彼女
はたちまち息を呑んだ。

そこには、縄を打たれたゲルバン達の姿があった。だが、彼女を驚かせたの
は、そんな当たり前の成りゆきではない。彼らを連行していく憲兵達の先頭に、
なぜかヴォルグがいたのである。

「……？ なにやってんだろ？」

護衛に仲間を紛れこませるというのは、今までにないやり口だった。それ故、
詳細を報告する必要があるだろう。だとしても、それは商隊長のジャゼリーが
為すべき仕事であるはずだ。

「なに？ いったい、どういう事よ？」

暫しの躊躇いの後、彼女は気配を殺して彼らの後を追いはじめた。

「ごめんごめん。ひよっとして、待たせちゃったかな？」

ヴォルグが広場へ戻ってきたのは積み荷の検閲も終わり、いよいよ出発という段になってのことだった。

「何やってたの？ なにか、よっぽど大切な用でもあったのかしら？」

「……ああ、ちよつとね」

シエラの意味ありげな呼びかけに、彼はそれだけしか答えない。いくら問いつめてみても、ただ苦笑を浮かべてみせるのみだった。

それからの日々は、驚くほどに平穩だった。少々暑いことを除けば天候は概ね良好で、なにより賊の襲撃もない。もともと、三度も襲われるなど、滅多にあることではないのだが。

シエラもすっかり彼女らしさを取り戻し、翌日にはさつそく口論が再開される。お互いの口調は以前にもまして激しくなったが、ヴォルグはもう怒りを覚えたりはしなかった。言いたいことを言った末に、決まって大笑いで幕を閉じる。それは、まるで滑稽劇を演じ合っているかの様な、今まで味わったことのない感覚だった。

こうして、ヴォルグ達の仕事は終わった。配られた皮袋と証明書を手に、護衛者達はひとりひとり夕闇の雑踏へ消えていく。またどこかで会う者もいるだろうし、これつきりとなる者もいるだろう。だが、感傷にひたってなどいられない。この仕事を続ける限り、出会いと別れは繰り返されていくのだから。

「元気でな。……料理の方も頑張れよ」

「もちろん。今度会ったら、なんか作ってあげようか」

「ああ。楽しみにしてるよ」

シエラとヴォルグが交わした言葉も、たったそれだけだった。軽く手を振り

あつて、躊躇なく別々の方向に歩きだす。二人は、一度たりともお互いを振り返ろうとはしなかった。



垂れこめた雲の隙間から、やがて一筋の陽光が振りそそぐ。潮の香りが漂う街に、三日目の朝がやってきた。

いつもより早く起きたヴォルグは、朝食もそこそこに宿を出た。その手には、なにやら図形が描きこまれた羊皮紙が握られている。

ときおり立ち止まってはそれを覗きこみ、ヴォルグはとある宿屋を探し求めた。デロスにはもう何度も来ているが、それでも広大な市街の全容を把握するには至っていない。名も知らぬ宿の所在となれば、なおさらだった。

「おいおい。これは……、どの通りなんだ？」

苛立たしげな呟きはベルダで仕事を伝えにきた、あの若者に向けてのものである。この羊皮紙も、あれと同じ方法で届けられたものなのだ。

「つたく。もつと、分かり易く描いてくれりゃいいのに」

賑やかな市場を通りぬけ、ヴォルグは倉庫街へと歩を進めた。実のところ、この道を彼はもう四回も往復している。地図に記されている脇道がどれなのか、どうしても判別できないのだ。仕方なく勘に頼ってみたのだが、結果は御覧の通りである。

「おい、あんた！ ひよつとして、ヴォルグじゃねえか？」

今度こそはと地図を睨みつけるヴォルグを、不意に聞き覚えのある声が呼び

止めた。おもむろに顔を上げると、人混みのなかからジャゼリーが歩み寄ってくるのではないか。

「やあ、あんたか」

「どうした？ 仕事を探してるんだったら面倒みるぜ」

「いや、そうじゃないんだ。頼みたいことがあるのは、確かだけどね」

渡された羊皮紙を一瞥するや否や、ジャゼリーは呆れた顔で笑ってみせた。

「こりやあ省略しすぎだな。分からねえのも無理ねえよ。いいか、このまま進んで、五つ目の十字路を右だ。海にぶつかったら、また右。そこまで行きや、すぐ分かると思うぜ」

「へえ、さすがは地元つてとこだな。助かったよ」

ヴォルグが差し出した掌を、彼は力強く握り返してくる。

「礼を言うのはこっちの方さね。実は、事情を聞いたハッグス様がえらく喜んでくれてな。ここだけの話、すげえ臨時収入が入ったんだよ」

リュージュを再びガイゼルまで送り届けるのが、彼の次の仕事になるらしい。その時はまた護衛を頼めないかと、ジャゼリーは真顔でヴォルグに持ちかけた。

「……出発はいつ頃になるんだい？」

「まだ、花嫁衣装の見立てやら、組合のお偉方への挨拶やらが残ってるからな。だいたい、十日先つてとこだろう。浮いた仲介料込みの報酬でどうだ？」

「ああ、是非やらせてもらおうよ。その時は宜しくな」

即座に了解してみせて、ヴォルグはその場を後にした。湧き起こる罪悪感に、心の奥がちくりと痛む。

彼には悪いが、この話はおそらくご破算になるだろう。あの連中が仕事をし

損じるなど、十中八九あり得ない。

ジャゼリーの指示通りに進んだ彼は、ほどなくお目当ての場所へとたどり着いた。それはこぢんまりとした木造二階建てで、背後には波穏やかな海が広がっている。染み一つないカーテンが引かれ、化粧板で飾られた、なかなか綺麗な宿だった。およそ護衛者には相応しくない、お洒落な趣が漂っている。

「おいおい。本当にここなのかよ？」

訝しげに地図を見つめるも、周囲の様子は完全に一致している。暫し躊躇った末に、ヴォルグは眼前の扉へと手を伸ばした。

そこには、柔らかな紅茶の香りが広がっていた。どうやら、泊まり客のための食堂であるらしい。それぞれの卓では、人々が思い思いに朝食を楽しんでいた。

「……失礼」

突然入ってきた革鎧の男に、一斉に訝しげな表情が向けられる。気まずさに耐えつつ視線を巡らしたヴォルグは、そのなかに見慣れた顔立ちを見つけた。鎧を脱ぎ、ズボンをスカートに替えた彼女の姿は、堅気の客達にすっかり溶けこんでいる。

「よお、探したぜ」

茶器を口につけたまま、シェラは言葉を失っている様子だった。窓からの朝日に、栗色の髪がきらりと輝く。

「座ってもいいか？」

ヴォルグは返事を待たずに、彼女の対面へと腰を下ろした。

「なんだよ。給仕をやってるのかと思ったら、そうじゃないんだな」

「どうしたの？ いったい、なんの用よ？」

「……ハッグスのことを嗅ぎ回ってるって聞いたもんでね。ひよつとして無茶するつもりじゃないかって心配でさ」

そう言い終わるより早く、目尻の上がった眼が見開いた。あたふたと周囲を見回しつつ、彼女は茶器を卓へと戻す。

「ど、どうしてそれを？」

潜められた問いかけに、しかしヴォルグは答えようとしなかった。

「ほっといてよ。あなたには関係ないでしょ」

「悪いことは言わないから、止めておけよ。そういうのは専門家に任せとけばいいのさ」

「そ、そういうのってどういう意味よ？ 私は別に……」

「いいから！」

不意に荒げられた声に、シエラの身体がびくりと震える。再び集まってしまった視線が離れるのを待って、ヴォルグは静かに言葉を繋いだ。

「納得できないなら、あと二日だけ待て。絶対に先走りするんじゃないぞ」

「な、なによ、偉そうに。なんで、あなたにそんなこと言われなきゃいけないの？」

「……惚れた女の身を案じてどこが悪い？」

一瞬の沈黙を挟んで、大きく息を呑む音が聞こえてきた。おずおずと上げられた彼女の顔が、みるみる真っ赤に染まっていく。おそらく、それは自分も同じだろう。火照った顔に汗が滲んでくるのが、はっきりと自覚できる。

「ば、ばっかじゃないの？ あれは、作りだって言ったじゃない」

「ああ、分かってるよ！」

彼女の笑いを遮って、ヴォルグが派手に椅子を揺るがす。恥ずかしいことだが、すっかり舞い上がっている己を感じる。周囲の視線など、もうどうでも良かった。

「分かかって言ってるんだ。俺はお前の素顔が気に入った。給仕としてでもない、護衛者としてでもない、お前の根っこが好きになった。それだけだ」

まっすぐ指さされたその先で、シエラがふらりと立ち上がる。だが、彼女の腰は、すぐに力なく落とされてしまった。

「いいな。二日だけ待った。もし、何も起こらなかつたら、その時は俺が一緒に行つてやる」

そう言い残して飛びだしていく彼を、シエラはただ呆然と見つめていた。

そして迎えた三日目の朝、衝撃の知らせがデロスの街を駆けぬけた。

ハッグスの邸宅が、正体不明の賊に襲われたのである。彼らはたった数人だけに聞わず、私兵達の防御網をいとも容易くかいくぐった。そして、遂には館の中心部にまで侵入したのだという。

だが、人々の興味を引きつけたのは、事件の顛末だけではなかった。これほどの手際の良さにも関わらず、実害があまりに小さすぎるというのである。

この騒ぎで、命を落とすに至った者は一人もいない。それどころか、盗まれたものすらないというのだ。ただ一つ、彼の婚約者が連れ去られたことを除いては、だが。当局の調べに対し、ハッグスは怯えたように何も語らず、被害届すら提出しないつもりでいるらしい。

ヴォルグが宿屋に顔を出したのは、その日の昼。シエラが午餐のパンを呑み

こみ終わった時だった。

「な？ 言ったとおりになっただろ？」

おもむろに腰を下ろすヴォルグに、訝しげな視線が向けられる。無言で紅茶を含むシエラを、彼は涼しげな表情で見つめ返した。

「……あんた、いったい何者よ？」

「酷いな。俺を忘れちゃったのか？」

「ごまかさないで！ それとも、惚れた女に嘘をつくつもりなの？」

「わ、分かったよ。まあ、落ち着けて」

またも注目の的となって、ヴォルグが苦々しげに顔をしかめる。しかし、シエラはそれを気にする様子もなく、青い瞳にその表情を映りこませていた。

「ちよつと散歩でもしないか？」

「ふーん。つまり、ここじゃ言えない話ってわけだ」

「まあ……、そんなとこだな」

「いいわよ。そういうことなら、お付き合いしましょ」

苦笑を浮かべるヴォルグを無視して、彼女はそそくさと席を立つ。そして、歩み寄った扉を半ば強引に押しはなつた。

「さ、着いたぜ」

ヴォルグが彼女を案内したのは、街を見下ろす小高い丘の上だった。足下は一面、濃緑の草に覆われ、見上げんばかりの大木が見事な枝振りを披露している。その幹に寄りかかるようにして、二人は静かに腰を並べた。街壁の外であるせいか、周囲に人影はまったくない。

「綺麗ねえ……。こんな場所があったなんて、全然知らなかったわ」

「だろ？　こういうの、好きなんじゃないかと思ってるさ」

その問いかけに、シエラは反応しなかった。ただ眼を細め、彼方の海を見やるのみである。

できる事なら、このまま忘れてはくれないものか。ヴォルグの心を、そんな微かな期待が過ぎる。だが、彼の想いとは裏腹に、シエラの唇はやがて静かに動きはじめた。

「さあ、そろそろ話してよ。あんた、何者なの？」

「……お前と同じ護衛者だよ」

「うそ言わないで！」

上擦った叫びに合わせて、小柄な身体が向き直る。顔にかかる髪を意にも介さず、彼女はたじろぐヴォルグににじり寄った。

「関所で、お偉いさんと何か話してたでしょう？　私、見ちゃったんだから！」

「ああ、知ってるさ。あいつらを引き渡してる時だろ？」

ため息混じりの呟きに、彼女の顔がみるみる赤らむ。そして、その声が一段と高く、大きくなった。

「そ、そう。そういうことなら話は早いわ！　あの時、どう見てもあんたの方が立場が上みたいだったじゃない。そんな護衛者、どこの世界にいるっていうのよ！」

「……ここにいる。俺は惚れた女に嘘なんかつかないぜ」

切り札を突き返されて、シエラが思わず言葉に詰まる。あたふたと視線を逸らすその姿に、ヴォルグの口元が小さく緩んだ。

「なんと言ったらいいんだろうな。あれは臨時雇いなんだ。お前の給仕と同じだと思えばいい」

「雇い主は……、ガイゼル軍なの？」

「それは言えない。今回の標的はゲルバン達、盗賊だった。あいつらはあの手口で、帝国中を荒し回っていたんだとき。勿論、他の国も手をこまねいていたわけじゃない。だけど、商隊に紛れこむ奴が毎回代わるから、なかなか尻尾が掴めなかったらしいんだ。怪しい奴を虱潰しにしたいところだが、それにはどうしても人手が足りない。それで、臨時雇いの俺にお鉢が回ってきたってわけ」

要点の伴わない説明に、シェラの首が小さく傾く。彼女は眉間に指をあて、必死に見えない答えを探している様子だった。

「じゃあ、ハッグス宅を襲ったのは誰なのよ？ どうして、こうなるって知ってたの」

「そっちは、偶然見つけたおまけってとこだな。事情を伝えたら、案外簡単に動いてくれたよ。『ガイゼルの民が苦しんでいるのを、見過ごしてはおけない』とか言ってさ。それなら、もっと早くなんとかすればいいんだよな」

斜面を吹き上がってきた風に、枝の影が大きく揺れる。シェラはなおも何か訊ねようとしたらしかったが、それは降りそそいだ葉音にかき消された。

「悪い……。これ以上は勘弁してくれ。お前も、余計な厄介事を抱えこみたくないだろ？」

静寂が戻ってくるのを待って、ヴォルグは剣を手に立ち上がった。そして、それを差し上げながら、ゆっくりと踵を返す。

「じゃあな。またどこかで一緒にになったら、よろしく頼むよ」

「ちよつと待つて！ あんた、これからどうするの？」

風に乗って届いた声に、ヴォルグの足がぴたりと止まる。振り向けた視線の先で、シエラは靡く髪を押さえて佇んでいた。

「ああ？ 取りあえずはガイゼルに戻って……、さっそく次の仕事を見つける
さ」

「なら、一緒に行ってもいいかなあ？」

「へ？」

言葉を失うヴォルグの元に、小さな身体が駆け寄った。両の指をいじり回していた彼女が、やがて静かに顔を上げる。

「暫く一緒に仕事しない？ 私さ……、あんたの素顔が知りたくなってきちゃった」

そこには笑顔があった。給仕の時とも、護衛者の時とも、そして理想を重ねていたあの笑顔とも違った、はにかんだ表情の彼女がいた。

「ご、誤解しないでよ。その……、好きとか嫌いとか、そういうのじゃないんだから」

素顔が気に入ったなどとは、我ながらよく言ったものだ。そう、ヴォルグは思う。彼女はまるで一流の役者だ。その真の姿を観客達が知ることはないように、自分もまた彼女の演技に一喜一憂しているだけなのかもしれない。

「それとも……、ひよつとして迷惑、かな？」

だが、役者の周囲の者達は、その本当の姿を知っている。一人の人間としての、飾らない素顔を知っているのだ。

「ど、どうしたの？ なんで黙りこくってるのよ？」

じれったそうな促しに、ヴォルグの表情がぱつと輝く。

「迷惑なわけないだろ！ いいとも、素顔くらいいいくらでも見せてやるぜ！」

「……嘘ばかり」

シエラの笑い混じりの眩きはしかし潮風に吸いこまれ、ヴォルグの耳には届かなかった。

了

着 稿 一九九七年 十一月三十日

第一版 一九九八年 四月十日

第二版 一九九八年 八月二十八日